

令和元年6月21日現在

機関番号：32675
研究種目：基盤研究(C) (一般)
研究期間：2016～2018
課題番号：16K02334
研究課題名(和文)バレエ『ジゼル』演出振付の変遷に関する研究

研究課題名(英文)A History of the ballet 'Giselle'

研究代表者

鈴木 晶 (Suzuki, Sho)

法政大学・国際文化学部・名誉教授

研究者番号：50196804

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：近代バレエは1830年代から40年代にかけて最初の隆盛を迎えたが、当時のバレエはそのままの形ではひとつも残っていない。本研究では、現存する最古のバレエである『ジゼル』について、初演当時の作品を極力再現し、その後どのような変遷を経て現在の形になったのかを明らかにしようとする試みである。結論を一言でいうならば、演劇的な部分が大幅に削除され、舞踊的部分が増えたことが明らかになった。詳しい研究成果は2019年に出版予定。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近代バレエは1830年代から40年代にかけて最初の隆盛を迎えたが、現在上演されている当時のバレエはいずれも後世に大きく改訂されており、現在の形にもとづいて当時のバレエを論じること、正しいバレエ史を書くこともできない。本研究は、現在上演されている『ジゼル』が初演時とは大きく異なり、演劇部分が減って舞踊部分を付け加えられたことを明らかにした。これによって、正しいバレエ史へ一歩近づいたといえる。

研究成果の概要(英文)：So-called modern ballet reached its first peak in eighteen thirties and forties, but ballets of those days have not survived. Romantic ballets which are danced today are drastically revised. If we are to write a correct ballets history, we have to try to trace the change that romantic ballets have suffered and try to reconstruct the original. This research tried to show that 'Giselle' which is danced today is very much different from the 1841 original. Our result will be published as a book in 2019.

研究分野：バレエ史

キーワード：舞踊史 バレエ史 ロマンティック・バレエ ジゼル

1. 研究開始当初の背景

申請者は 2012-15 年科学研究費基盤研究(B)「バレエ文化史研究の基盤整備」(課題番号 24320044)の成果報告書に次のように記した。「ヨーロッパ文化史において、舞踊は最も重要な柱のひとつであるにもかかわらず、これまで美術史や音楽史と比べて、舞踊史は著しく未発達であった。舞踊は『形に残らない』ことが最大の原因である。いっぽう、芸術学全体においても、美術学や音楽学に比べ、舞踊学はその発展が著しく遅れている。分野として大変小さく、学術大系、特に芸術学における位置づけもいまだ不安定である。さらに舞踊研究の中でも、バレエ研究は一貫して『少数派』であり、大学に籍を置くバレエ研究者はきわめて少ない。この状況は 3 年経った今でも変わらない。本研究はこうした状況を少しでも打開しようという試みである。

バレエ芸術は時代とともに大きく変化してきたと考えられる。同じ舞台芸術であるオペラも、楽譜と歌詞があるにもかかわらず、その演出は大きく変化してきた。バレエは、台本と楽譜は残っていても、肝腎の振付はほとんど記録されていないため、その時代による変化はオペラに比べてはるかに大きい。しかも、バレエにおいて最も重要なのは振付である。変化が悪いわけではない。バレエ作品は時代の好みに応じて変化していくべきであろう。しかし、歴史的変遷を可能な限り調査しないと、バレエ作品は、あたかも羅針盤を失った船のように迷走し、本来の姿がわからなくなってしまふ。またわれわれは創作者たちの功績にたいするリスペクトを失ってはならない。現実問題として、バレエの実践者たちには、古い形を調査・分析する余裕はないだろうが、われわれ研究者はその変化を調査・分析し、本来の姿をできるだけ明らかにする責務がある。

しかしながら、これは非常な困難を伴う。上に述べたように、音楽における楽譜に相当する舞踊譜に記録された振付はほとんどないのである。舞踊譜がなかったわけではなく、16 世紀のトワノ・アルポのオルケゾグラフィ以来、いくつもの舞踊譜が開発されているが、舞踊が複雑化するにつれ、ほとんど記録されなくなったのである。ところが『ジゼル』の場合には、大変幸運なことに、ふたつの記録が残っている。ただし後代の、たとえばラバノーテーションなどとは異なり、アンリ・ジュスタマンの記録は言語による説明と図による。サンクトペテルブルク振付譜は楽譜に言葉が書き込まれているだけである。それでも、これらの舞踊譜によって、かなりのことがわかる。そこで、それらを手がかりに、『ジゼル』の変遷を追おうというのである。

これは未発達のバレエ史学の確立にも大きく寄与するはずである。

2. 研究の目的

1841 年にパリ・オペラ座にて初演された『ジゼル』は世界最古のバレエの一つである。すなわちバレエが最初の隆盛期を迎えたロマン主義時代から現代まで生き残った唯一のバレエである。ただしオペラ座では 1850 年代以降 20 世紀に入るまでレパートリーから外されていて、上演されることはなかった。外国でも多少は上演されたものの、最終的にはロシアにおいてのみ生き残ったのである。だが、生き残ったとはいえ、初演時と現代では振付演出が大きく異なっている。とくにマリウス・プティパによる改訂の以前と以後では大きく変わったと考えられる。本研究では、『ジゼル』の演出振付が 170 年の間にどのように変遷してきたかを詳細に調査し、それを分析することによって、現代の演出がいかに初演時と違っているかを明らかにし、現代および将来においてありうる新たな振付のヒントとしたい。それと同時に、19 世紀初頭に生まれた近代バレエ全般が現代までの間にどのように変容してきたかを知る手がかりとする。

3. 研究の方法

- (1) アダンの『ジゼル』自筆楽譜とそれをめぐる書簡を収集し、それを分析することで、『ジゼル』の音楽の最初の姿を明らかにする。
- (2) 『ジゼル』の、現在知りうる最も古い形である、アンリ・ジュスタマンによる舞踊譜と、いわゆるサンクトペテルブルク振付譜を分析する。本研究の最も重要な先行研究である Marian Smith, *Ballet and Opera in the Age of Giselle* (Princeton University Press, 2000) は、サンクトペテルブルク振付譜の分析に基づいた研究であるが、ジュスタマンの舞踊譜には触れていない(まだ出版されていなかったため)。ジュスタマンの舞踊譜を対照とした詳細な研究もいまだに発表されていない。
- (3) 申請者が 2012-15 年科学研究費基盤研究(B)「バレエ文化史研究の基盤整備」(課題番号 24320044)において作成したパリ・オペラ座全公演日程表をもとに、オペラ座における『ジゼル』の上演記録を作成する。また、法政大学図書館所蔵の「ロシア・バレエ・ポスター集」と早稲田大学演劇博物館所蔵の「ロシア帝室劇場年鑑」をもとに、ロシアにおける上演記録を作成する。
- (4) 『ジゼル』の現在の演出振付をできるだけ視察する。

4. 研究成果

- (1) 2016年4月から6月にかけて、3回にわたり、法政大学において、バレエ研究者とバレエ評論家を対象としたバレエ史研究会を開催した。申請者はこのバレエ史研究会において、サンクトペテルブルク振付譜を紹介しながら、その振付譜の分析の成果を発表した。身内に不幸があったため、研究会は中断せざるをえなかったが、2018年より日本女子体育大学准教授の森立子氏が引き継いでくれることになり、氏の科学研究費助成事業の一環として、すでに5回開催されている。
- (2) 研究協力者の高島登美枝が2017年にフランス国立図書館に出張し、特別な閲覧許可を得て、アダンの『ジゼル』自筆譜を見ることができ、その後、フランス国立図書館からカラーのデジタル図版を購入した。それにより、これまでモノクロの写真ではよくわからなかった、赤インクによる書き込みを分析することができ、『ジゼル』の曲の最初の姿が明らかになった。成果のごく一例を紹介すると、ふつうオペラやバレエでは作品中に登場するメロディを序曲に用いるが、『ジゼル』の場合はそうではない。そのことは従来、謎とされてきたが、自筆楽譜の分析により、そのメロディが初演時にカットされたことが明らかになった。詳しい研究成果は後に述べる書籍の中で公表する。
- (3) アンリ・ジュスタマンの舞踊譜と、サンクトペテルブルク振付譜を日本語に翻訳した。ジュスタマンの舞踊譜は古くから一部の人にしかその存在を知られていなかったが、2008年にドイツのタンツアルヒーフから出版された。サンクトペテルブルク舞踊譜はサンクトペテルブルクの演劇博物館に所蔵されているもので、これは申請者が現地まで赴いて閲覧し、さらに同博物館に交渉して、全ページをデジタル化してもらい、購入した。日本語訳は後に述べる書籍に、著作権の許す範囲で、掲載する。この両者（どちらが先なのかは不明である）を詳細に分析することを通じて、「プティパ」以前の『ジゼル』の演出振付はかなり明らかになった。
- (4) 日本におけるバレエ指揮者として、また編曲者として第一人者であり、またバレエ音楽研究者としても第一人者である福田一雄氏に、長時間にわたるインタビューをおこなった。氏は『ジゼル』に関してもすでにその著書に書かれているが、そこに書かれていない事柄について講義してもらい、さらには貴重な資料の提供を受けた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

- (1) 鈴木晶「『ラブ・ネバー・ダイ』のファントムは、アーティストとして純化され、君臨する」『ラブ・ネバー・ダイ』公演プログラム、ページ記載なし、2019、ホリプロ。
- (2) 鈴木晶「バレエの交響曲を完成させた男 プティパの生涯をたどって」『ダンスマガジン』 査読無, Vol.2018, No.7, pp.34-39.
- (3) 鈴木晶「ニューヨークのバレエの現在」査読無, 『日本照明家協会誌』, 第578号, 2018, 36-37。
- (4) 鈴木晶「プティパ生誕200年」査読無, 『日本照明家協会誌』, 第582号, 2018, 32-33
- (5) 鈴木晶「『オペラ座の怪人』とパリ・オペラ座」劇団四季「オペラ座の怪人」公演プログラム、ページ記載なし、査読無, 2017

〔図書〕(計1件)

- (1) 青山昌文編著『舞台芸術の魅力』放送大学教育振興会, 2017, 総ページ 276p, 鈴木晶の担当箇所 pp.70-99.

〔その他〕

ホームページ等

研究成果は2020年に書籍として出版する予定である（現在、出版社と交渉中）。

6. 研究組織

(1) 研究分担者

なし

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：高島 登美枝
ローマ字氏名：TAKASHIMA Tomie

研究協力者氏名：設楽 聡子

ローマ字氏名：SHITARA Satoko

研究協力者氏名：森 立子

ローマ字氏名：MORI Tatsuko

研究協力者氏名：川島 京子

ローマ字氏名：KAWASHIMA Kyoko

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。